

チューリヒ歌劇場の《指環》完結

アンドレアス・ホモキ総裁がチューリヒ歌劇場に遺すワグナー《ニーベルングの指環》が、11月5日に初日を迎えた《神々のたそがれ》で完結した。この《指環》はジャンドレア・ノセタが音楽総監督を受諾した最大の目的と見られ、1話ずつ音楽的に成長してきた。ホモキの演出は毎回批判的だが、今回は効果的な部分も認められた。そしていよいよの勝因は、安心して任せられる歌手に恵まれたことだ。ジークフリートのクラウス・フロリアン・フォークトも、ブリュンヒルデのカミッラ・ニールンドも初役とは思えない安定感で、楽々と長丁場



総裁ホモキ演出によるチューリヒ歌劇場の《指環》が完結した。《神々のたそがれ》から
© Monika Rittershaus

をこなし、物語に集中できた5時間半はゼいたくなく体験だった(11月12日所見)。

ヤクブ・オルリンスキのリサイタル

10月にワグナーから発売された新譜『Beyond』ツアーでヤクブ・オルリンスキが11月23日にKKL(ルツェルン・カルチャー・コングレスセンター)を訪れた。イル・ボモ・ドローの演奏で舞台は16世紀に飛び、黒いマントをはおるヤクブ・オルリンスキが登場すると、退廃的で懐古的な色気が加わる。手が届くようについて、非現実的な世界を構築し、モンテヴェルディから始まる古典を、自然な発声と完璧な息のコントロールで聴かせる。カッチーニ《アマリッリ》は先月のオープ

ス・クラシック授賞式で聴いたときより精度が抜群に高く、心を掻きまわした。裸足で客席に降りて歌ったリ、マントをスカートのようにはきいたり、ネットイ《女は歳をとればとるほど》と《私は年寄りで、忍耐強く》を老婆になりきって歌い、笑いも取る。ブレイクダンスやアクロバットも決め、英語でコメントすれば、観客の心もつかみ、何曲もアンコールに応える。マントの下はベージュのスーツ、そしてジャケットの下は黒いブラウスという各衣裳も効果的に使った演出で、「モノオペラ」と呼べるような芸術作品に仕上がっていた。

見逃せない公演が続くトーンハレ

トーンハレは話題の公演が続いた。2022年は転倒でキャンセル、2023年も他国での公演をキャンセルしているマウリツィオ・ポリーニ(P)のリサイタルが10月30日に実現した。楽譜を見ながらシェーンベルク「6つの小さなピアノ曲」を演奏後、予定外のショパンを弾き出した。そして、譜めくりの若い女性が、ポリーニの領くサインに2回従わず、楽譜通りに譜めくりしたことによって彼女を怒鳴りつけ、最後は音楽を止め、自分で譜めくりして弾き続ける事態にまで発展した。半分しか埋まっていなかった客席は生きた心地がしない。その後のノーノ《苦悩に満ちながらも清らかな波》でも、楽譜を引つ張ったりしながら弾くので落ち着かない。そして休憩を挟まずショパンを弾き出すというのを客席の婦人がたしなめた。休憩後、ショパン《舟歌》でようやくイタリアのおおらかさ、スケールの大きさがポリーニらしさを引き出した。ポリーニのリサイタルを聴けるのはこれが最後かもしれない、という予感からか、満場総立ちの拍手が起こった。

アルゲリッチとデュトワの共演が実現

チューリヒ歌劇場とトーンハレがコラボする「ラフマニノフ生誕150周年記念」4公演が、ノセタが振るトーンハレ管弦楽団の公演(11月8日所見)と、トーンハレのパヴァー・ヤルヴィ音楽監督が歌劇場専属楽団フィルハーモニア・チューリヒを振る11日の公演で完結した。両方ともソロはフランチェスコ・ピエモンテジが務め、「ピアノ協奏曲第4番」と「交響曲第1番」を組み合わせた前者はメリハリを付けた緊張感

と壮大な表現力が引き立ったのに対し、《パガニーニの主題による狂詩曲》と「交響曲第2番」を組ませた後者は、小振りな歌劇場で、悪魔に取り憑かれたような狂詩曲を聴けたのがゼいたくだった。

13日にはアンドレ・オロスコーエストラータ率いるコロンビア・ユース交響楽団がヒラリー・ハーンをソリストに迎え、メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」で共演した。押し出しの強さがもつとほしい部分もあり、ハーンのよさが最大限に発揮されていたとはいえないが、指揮者とは息が合い、なによりも、次世代を引き上げようという姿勢が感じられる。ろうそくや体の動きで演出を加え、現実には戦争が起こっている現在に投影させたシオスタコーヴィチ「交響曲第5番」は、楽しそうに弾く自国コロンビアの曲と共に、長く記憶に留まる公演となった。

そして最後は23日にホッホウ音楽事務所が実現させたマルタ・アルゲリッチとシヤルル・デュトワ共演だ(アルゲリッチとデュトワはかつて結婚していた)。スイス・ヨーロッパ交響楽団員がみな、二人の子供であるかのように、温かい共演を聴かせた。ラヴェル《クーランの墓》のあと、アルゲリッチが登場すると、今年のルツェルン音楽祭を病気でキャンセルして以来、待ちわびていた聴衆たちがざわついた。デュトワのフレーズの揺らしかたと、そこに自然と乗るアルゲリッチの息はさすがにピッタリ合い、以前別の指揮者と共演した際と同曲とは思えないほど熱く、シューマン「ピアノ協奏曲」を弾いた。これからこの二人の共演は絶対聴き逃さない。休憩後のベートーヴェン「交響曲第7番」は独特のアクセントを聴かせた。